

<p>2017年</p> <p>会報95号</p>	<h1>旧河澄邸棲鶴楼文芸サロン</h1>	<p>東大阪文化財を学ぶ会</p> <p>会長 南 光 弘</p>
---------------------------	-----------------------	-----------------------------------

10月18日(水)

1. **集合時間** 午前9時 (注意：通知の時刻より早めました)
2. **集合場所** 石切駅 改札口・奈良側 南携帯 090-8375-9655へ
3. **参加** 会員無料、事前申込み関わらず是非ご参加下さい。
4. A～Cのコース別に活動します。
5. **全体交流** 午後12時10分をめぐり、河澄邸において参加者全員による交流会。
解散予定は、午後12時30分頃

A 龍の口霊泉など神武天皇関係遺跡探索コース

① 日程

石切駅<9時15分>→(大龍寺)→神武天皇聖蹟孔舎衛(衙)坂頭彰碑→龍の口霊泉→五瀬命負傷碑→(神武天皇聖蹟楯津頭彰碑→善根寺春日神社内古戦場跡碑)→河澄邸

② 主な探索先について

神武が長髓彦と戦ったという孔舎衛坂。神武の兄、五瀬命(イツセノミコト)は肘に流れ矢が当たり負傷する。血を洗い流した龍の口霊泉。神武は、それ以上前進することができなく退却を余儀なくされ、「そこで草香の津まで戻り、盾を並べ、声を揃えて勇ましく雄詰(おたけび)をした。あらためてその津に名づけて楯津の浜。」

探索地は以上だが、神武は「日下直越道」を通り「東に美き地(よきくに)有り」とヤマト入りをめざそうとした。この「日下直越道」は諸説があり、特定はされていない。今回は、大龍寺の東側、日下町六丁目あたりをスタートするルートを想定しているが、下見の結果、孔舎衛(衙)坂、龍の口霊泉までの道路状況が極めて悪く踏査することは困難かと思われる。途中までの探索になることをあらかじめご了承の程を。コース全体が実施できない場合、B、Cコースに合流も結構。

③準備物 履き慣れた靴 必要な方はハイキング用のストック、軍手など

※担当 後藤 政雄 田村 實 西田 裕洋 竹内 正美

B 生駒山山麓自然探索コース

① 日程

石切駅<9時15分>→(大龍寺)→河澄邸をベースにして自然観察、スケッチ、写真などなどの活動を愉しむ

※担当 並松 晃

C 『日本書紀』神武紀を読むコース

① 日程

石切駅<9時15分>→(大龍寺)→河澄邸にて日下と「神武」について学ぶ

② 内容

『日本書紀』神武紀を読み解く

③ 準備物筆記道具。『日本書紀』神武紀は事務局がコピーして用意する。お持ちなら『日本書紀』(I)』『古事記』を持参ください。 ※担当 南 光弘

古代史の三大難問の一つが「神武東征」である。

≪「神武」とは、どこから日下に≫

(1) 神武(127才)、孝昭(113才)、孝安(137才)、孝靈(128才)孝元(116才)、開化(115才)と9代の間に100才以上が6名もいる。(欠史8代ともいわれる)研究者達は寿命や在位年数の虚偽は中国の歴史(暦)を見習い、革命の起こる年、辛酉の年を神武元年とし、その正月

に即位したとした。中国の周の恵王（BC660年）に合わせたのも中国に比肩する国史とするためである。

「二倍年曆で春耕秋収を年紀となす」との説もある。

(2) 神武は初代天皇で、神倭伊波礼比古（カムヤマトイワレヒコ）といわれ、始馭天下之天皇（ハツクニシラススメラミコト。御肇国天皇・崇神）とか狭野命といわれていた。父は鵜葺草葺不合尊（ウガヤフキアエツノミコト）、母は玉依姫命という。宮は福岡県前原市三雲の高千穂宮と、高城修三が論証するのは祖父の彦火火出見尊（ヒコホホデミ）の命と同じ宮（筑紫の高千穂宮）筑紫連合王国の王族の一人で弥生王墓の多い前原とする。木花之開耶姫の細石（さざれいし）神社の存在と高祖神社の彦火火出見尊。また、「神武天皇は塩土老翁から「東に美き地あり」と聞いて東征を決意するのだが、その進発地が「日向国」ならば、東の方に向かって大和には行き着けず、太平洋を漂流してしまうだろう。しかし、それが「筑紫国」ならば、正しく東の方に大和が存在するのである。」と。

(3) 郷土史家の灰塚照明は4人の神武兄弟の三番目の兄、三毛入野命（ミケイリヌ）は福岡市の飯石の飯石神社や千里の三所神社、次男の稲飯命（イナヒ）は対馬の上県の木坂八幡宮（海神神社）、姉の奈留多（ナルタ）姫は前原市の産宮、神武の父鵜葺草葺不合尊（ウガヤフキアエズ）は前原市の波多江神社、玉依姫を前原市の志登神社とあげ、奈留多姫は「記・紀」の記録にない重要な証拠としている。（神武一族の居住地だった。）さらに、前原市の西側海岸部から背振山地に通じる街道沿いに「天降（あめおり）神社」、前原市東部に「日向峠」もあるとしている。

(4) 文化財を学ぶ会の内倉武久さんは

○高祖神社—『記紀』にいう一族の祖とされる瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）の子彦火火出見尊（ヒコホホデミ）、その母、玉依姫（タマヨリヒメ）を祀る。

○可也の熊野神社—末社に「可也社」神武を祀る。

○飯石の飯石神社—神武の4人兄弟の3番目の兄三毛入野命（ミケイリヌ）が祀られ（三所神社にも祀られている。別名三郎天子）

○対馬・木坂八幡—次男の稲飯命（イナヒ）

○産宮神社—神武の姉の奈留多（ナルタ）姫は

○細石神社・波多江神社—瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）の妻木花咲耶姫、姉の磐長姫

○志登神社—ウガヤフキアエズの実母・海神の豊玉姫

また、内倉武久さんは伊都国から耶馬吉国（やばいちこく）に代わった（卑弥呼・ヒミコらが伊都国に国旗を翻し、主権をとった）その結果、神武らは筑紫から東に行くことになる。その年代を「卑弥呼・ヒミコ、鷄林（新羅の旧名）に使者を送り、礼物を献じる」（『三国史記』173年の条）から、137年から180年前後とする。（中国の史書は伊都国の人口一万余戸＜魏略＞→千余戸＜魏志倭人伝＞と急減している。

「後漢書」（芭嘩）は邪馬吉国誕生の前を「戦乱」ととらえている。次男の稲飯命（イナヒミコト）は「母の住む海原に入った」（『記』より）海原・母豊玉姫（海神）の住む所。三男の三毛入野命（ミケイリノミコト）は「海の穂を飛び、常世の国に渡った。」自殺？二人は卑弥呼・ヒミコの水軍に負われて戦死・・・そこで「東へ行こう」と決め、かねて親交の厚かった吉備へ8年。大和へ。

（前原市の地図参照）

(5) 江戸後期の本居宣長が『古事記伝』執筆のため、大和地方をくまなく探訪したが「カシハラ」「カシ」のつく地名はなかった。（平安初期の『和名類聚抄』に「カシハラ」の地名はない。宣長は神武非実在を承知の上で執筆。

(6) 昭和15年、「紀元2600年」記念で神宮外苑のグランド整備をした。地下1.5mに木の腐った遺物、土器が出土、一帯を掘り下げたら村落跡らしきものが出土。さらに「イチイガシ」の大群が土中から（飛鳥川の洪水で埋まった）1600年前の頃と判断された。集落跡は縄文後期～弥生末期のものとして解読された。

(7) 戦時も勿論、明治期からいわゆる皇国史観が蔓延し有無を言わず教え込み死地に赴いたという負い目があり、戦後は崇神天皇から記述するなどの歴史教育だった。

(8) 河内の古代地形を『記紀』から読み取り、日下の地は陸地なのに船で行ったのはおかしい。（津田左右吉説）河内潟の地形を知らない。知っていたのは『記紀』だ。

